**秋**

**田中学の思い出**

**菅原　繁雄（昭和13卒）**

　わたしが秋田中学に入学したのは昭和８年で、ちょうど創立60周年の節目の年であった。当時の校舎は東根小屋町にあり、今の中通小学校の真向いで、古色蒼然としていたが、風格のある明治の建築の名残りをとどめていた。風の強い日は建物が軋むので、午後の授業は打ち切りになることもあった。

**菅原　繁雄**（すがわら・しげお）

大正９（１９２０）年生まれ。昭和16年12月広島高等師範学校卒業。昭和23年９月から同41年３月まで秋田高勤務。その後本荘高、県教委指導課長を経て昭和56年３月大館鳳鳴高校長を最後に退職。同年４月から４年間、県教委嘱託として秋田県立図書館に勤務

　学校の規模は１学年約２００名で５学年、１学級40名の５クラスで、校歌にも〝秋田の中学一千健児″とあるとおり、全校の生徒数は約１０００名であった。

　５年間汽車通学をしたので、朝は早く奥羽線の大久保駅から１時間足らずで秋田駅に着き、ほぼ集団登校のかたちで、８時前には学校についていた。

　服装は制服が霜降（しもふり）の小倉服で、制帽は矢留の校章に白線をつけていた。街（まち）で上級生やお互いに出会うと挙手の礼をかわし、先生に会うと一斉に停止敬礼をすることになっていた。

　通学時には１年から３年までは背嚢（ランドセル）を背負い、４、５年になると提げ鞄（さげかばん）になるので、にわかに優越感がわいた。

　教室の坐席は、壁頭と称して成績の良い順に後から坐るようになっており、前の者は黒板脳（なずき）と自嘲ぎみに呼んでいた。

　教育課程はくわしく覚えていないが、英数国漢をはじめ、教練まで必修科目になっており、教職員のほかに配属教官（佐官・尉官・下士官等数名）もおった。

　毎週月曜の朝には、全校生徒が校庭に集合し、皇居遙拝の後、校長の訓示を聞く朝礼があった。日常の授業は８時半すぎからはじまり、３時すぎまで、土曜は昼すぎで放課になっていた。部（課外）活動も活発で、野球・柔剣道等は全国大会でも輝かしい戦績を残していた。また学校行事も多彩で、春の全校遠足（仁別の学校林まで）、運動会（雲隊別対抗）、秋の学校祭等、今でも幽（かす）かに記憶がある。また在校中２年の時は由利の平沢海岸で海水浴、３年の時は大湊の海軍要港で艦内生活の体験、４年の修学旅行、５年時の17連隊での軍事教練と、いろいろな体験をした。

　先生がたは全国的規模で異動されるので、他県のかたが多く、生徒は授業以外でもいろいろな面で、感化影響されることが多かった。先生の特徴をす早くみつけ、じょうずに渾名をつけるのが得意で、渾名は先輩から後輩に受け継がれて、生徒どうしではむしろこちらにネームバリューがあったようである。

　日常の授業の一齣（こま）をすこし紹介すると、国語のＮ先生は〝秀才〟というニックネームで、ご自分の学生（一高・帝大）時代の話をよく紹介するかたであった。タバコは洋もくを吸われるとのことで、教卓にウエストミンスター（高級煙草）をあげておいたら、めざとくみつけられ、「これは誰からのプレゼントですか」とにっこりし一件（ひとくだり）の自慢話になった。英語のＴ先生は〝ジャイ″で、巨体をゆすりながら指名された生徒の発表がすんだところで、皮肉たっぷりの調子で名訳を披露される。地理のＳ先生は地図をかける長い棒で、授業中居眠りをしている生徒をコツコツとやり、「向こう三軒両隣」とまわりの者も共同責任をとらされた。

東根小屋町時代の校舎

　忘れられないのは年１回の生徒大会である。校紀粛正が表向きの看板であるが、実は５年生の下級生に対する気合いかけで、土曜の放課後校舎から体育館への廊下（地獄の三丁目といった）を通り、胡坐（あぐら）ですわらされると、演壇に生徒会長と応援団幹部が並び、次々に気合のかかった説教をし、数名の者が吊し上げられた。またＫ教頭先生の留任運動をし、知事公舎に直訴したが説得されたこともあった。

　昭和11（１９３６）年、楢山から手形に移るときは、各自が自分の机椅子を抱えながら延々長蛇の列をなした。

　「居は気を移す」の通り、真新しく木の香の高い新校舎は、さすがに快適で勉強へのファイトも湧いた。

　翌昭和12（１９３７）年、新校舎での事実上の最上級生として、永い母校の歴史と伝統を継承し、翌年３月巣立った。

　以上在学中の思い出をのべてみたが、多感な青春の一時期をよい師よい友とめぐり会い、心ゆくまで交歓できたことを幸せに思うものである。

**手**

**形校舎での思い出**

**相馬　高胤（昭和20⑤卒）**

私たち昭和15年入学生は５年間手形校舎で学んだが、この校舎は昭和11年に新築されたまだ新しいもので、当時は三吉神社に通じる手形の本通りに面し、北側は秋田鉱専（現秋田大学工学資源学部）、西側一帯は17連隊の練兵場で、それに沿って営林局のトロッコが走り、南西隅にあった校門の少し手前にそのトロッコの踏切があった。

**相馬　高胤**（そうま・たかたね）

昭和２年３月旧仙北郡神宮寺町（現大仙市神宮寺）生まれ。神宮寺小、秋田中学、上智大学（専、経済）卒。昭和25年秋田銀行入行、同57年東北機械に出向。

同61年八重樫建設に移り平成11年、72歳で退社。

　校門を入るとすぐの奉安殿に最敬礼し、それぞれの昇降ロヘ。校舎は２階建てが３棟、平屋が１棟で、一番手前の下が校長室や職員室等で、その上は３年の教室、続く棟に各学年ごとそれぞれの階を占めていた。一番奥の平屋は物理・化学用で階段教室が珍しかった。各棟を結ぶ渡り廊下が昇降口で、各自の下駄箱があり、学年に応じて下駄や足駄の後側に１本から５本の筋をつけさせられた。この昇降口に各学期末、席次が張り出されたが、学年末に名前のないのは落第ということ、外部の人も自由に見に来ていた。校舎の東側には大・小体操場があり、大の方には全校生が集い、朝礼や応援歌の練習、時に朝礼後登壇した配属将校が「本日Ｍ検をする」と宣告、体操場の隅で一列に並び、校医によるＭ検を受けたこともあった。大体操場に続いて音楽室、銃器庫があり、三八式歩兵銃や、重い村田銃などが並び、その隣りが剣道場、一番奥が柔道場で、床にはスプリングが入っており県内一の道場と言われていた。

　校庭は北東隅に野球のバックネットがあったが、戦争が激化し、金属回収で供出させられた。東側には相撲の土俵や、炭焼き小屋、さらに豚小屋まで作られ、豚当番は家から飼料になるものを持参したり、リヤカーを引いて駅前にあった木内支店等の食堂に残飯をもらいに行った。プールはなく、水泳部は空素沼（からすぬま）や将軍野遊園地に出かけた。練兵場ではグライダーの訓練がなされ、ラグビーの練習にも利用された。当然校庭では陸上競技部がトラック、フィールドの練習に励んだが、戦争が進み、土嚢（どのう）を担いで走るとか、手榴弾投擲（とうてき）等の体力章検定なるものの場ともなり、時に狭窄射撃の訓練も。また炭カスを敷いたグラウンドに正座、気合を入れられたこともあった。

　教室は各学年ＡからＥまでの５組、各クラス50名、２年からは上位１００番までが秀才組と称して２クラス。各教室ともその席は成績順に後から前へ、ために一番後は壁頭と称し秀才の代名詞。

　冬は言うまでもなく薪ストーブ、その上に蒸気をあげる金盥様（かなだらいよう）のものがあり、１年先輩のあるクラスでこれに小便を入れ、知らぬ先生手を洗い、悪戯がバレ、転校、停学等の大騒ぎがあった。

　私たちが２年の時、大東亜戦争が始まった。その進展により援農作業、土木作業等に駆り出されたが、４年まではどうにかそれなりの授業があり、英語はサップと称する副読本まであり、敵国語という軽視はなく、堂々と敗戦を予言する先生さえいた。

　５年生になると国鉄工機部、機関区、帝石八橋鉱業所等への小グループでの勤労奉仕が多くなったが、この間も授業は細々と続いた。一方軍事教練は多く、４年では追分廠舎（しょうしゃ）（従来の強首から移った）で３泊４日、現役下士官の生々しい戦場体験や、軍隊における要領なども教わった。18年夏、全県中等学校が南北軍にわかれ、能代東雲原で一大演習があり、各校とも民家等に分宿しながら能代まで徒歩行軍した。その他３年では鍛錬行軍と称して３泊４日で男鹿半島を徒歩で一周した。

昭和19年12月　川崎東芝電気へ動員時の全員写真。 250名入学したが､途中陸幼､陸士､海兵､予科練､特幹等の軍関係､旧制高校、高専等への入学者等で130名くらいしかいなかった。

　19年12月。私たち５年生全員東芝電気川崎工場に動員、宿舎は南武線鹿島田駅から十数分の田圃の中の社員住宅、６名ずつの分宿で川崎まで電車通勤、小グループに分かれての作業。

　20年３月10日。東京大空襲では宿舎の近くに爆弾、焼夷弾、機銃掃射までうけたが、幸い全員無事。近くの軍の倉庫が被爆、鮭缶が拾い放題。ふくれた缶詰を水で冷やしたりの大騒ぎ。

　そして３月30日。玉木校長がすし詰めの鈍行列車でおいでになり、東芝工場講堂で簡素ながらも厳粛に卒業式を挙行（卒業式は３月31日、４月２日説があり、一応卒業証書の日付としたが釈然としない。また川崎動員については秋高百年史に級友吉野重厚君が詳しく寄稿している）。

　１年後輩は白線なしの戦闘帽、４年夏には遠く群馬に動員。その地で４年で繰上げ卒業と大きな犠牲を強いられたが、私たちは動員中も黒いマントで闊歩、優れた先生たちやよき級友に恵まれ、中学生活を謳歌しえた最後の秋中生かもしれない。

**終**

**戦直後の校舎受難記**

**佐々木研吾（昭和26卒）**

**手形（深田）校舎の接収、焼失、石油学校への移転**



**佐々木研吾**（ささき・けんご）

秋田市土崎港出身。昭和26年３月卒業。

同年４月日本銀行入行。小樽支店業務課長、業務管理部・外国局・調査統計局各調査役、盛岡事務所長等を歴任、平成５年８月退職。現在八王子市に在住、地域奉仕活動に従事。

私が秋田中学校に入学したのは、先の大戦末期の昭和20年４月であった。その後、戦後の学制改革により新制高校へと移行（秋田南高等学校）し、26年３月に卒業するまでの６年間、在学した。入学当時の校舎は、手形字深田（現在の手形学園町、秋田大学教育文化学部の敷地）にあり、木造ながら堂々たる校舎であった。

　同年８月15日終戦、９月２日に降伏文書調印。早くも９月14日には進駐軍先遣隊が秋田市に到着、翌15日、２名の将校が視察に来校、17日には、県知事を通じて、進駐軍から「校舎全部を兵舎に充当するため９月19日午前９時までに明け渡せ」との命令を受けた。そこで玉木正行校長は、知事から提案された仮校舎の候補を実地調査した結果、秋田市将軍野の帝国石油（株）鉱手養成所（通称、石油学校）を借用することを決定した。そこで、24日、25日の両日、全校職員、生徒挙（こぞ）って学習机をはじめ必要最小限の校具を搬入した。この搬送の日、折からの激しい風雨の中で、体力乏しい中学生が、手形から泉、神田を経由して将軍野まで、難渋しつつも学習机（椅子がつながったもの）などを担いで、徒歩で搬送したのであった。こうして仮校舎で26日から２学期の授業を再開することができた。しかし、仮校舎は市内中心部から遠く、連絡する市営電車（新大工町―将軍野―土崎）の輸送力も極めて貧弱であったため、旧市内への復帰が急がれた。このため、旧市内の建物を探したが適当なものがなく、結局、旧陸軍の兵舎（第８師団歩兵第17聯隊）を転用するほかなしとの結論にいたり、進駐軍の了解を得て改造工事に取りかかった。

　この間、12月５日払暁、進駐軍に接収された校舎が全焼、進駐軍に貸与した机、椅子や倉庫に残置した校具を含め、一切が烏有（うゆう）に帰した。

**国民学校で午後授業**

明けて昭和21年、３学期の授業を開始するに当たり、進駐軍に対して旧兵舎の教室転用を再三懇請したが、認められなかった。そこでやむなく市内の国民学校を借りて、２月12日から、学年ごとに分散して午後に短縮授業（１校時40分・１日４校時、４年明徳・３年牛島・２年築山・１年中通の各国民学校）が実施された。なお、20年度の卒業式は明徳国民学校、21年度の入学式は中通国民学校で挙行、新１年生の授業は旭南国民学校で受けざるを得なかった。

**旧兵舎での苦難の日々**

昭和21年４月９日にいたり、ようやく県を通じて進駐軍の旧兵舎使用の許可が得られ、５月１日に移転、２日から授業が開始された。

　その旧兵舎は、現在の秋田市中通２丁目から同４丁目の辺りにかけて広大な敷地を占め、現在のアトリオンの辺りの広小路に面して営門があった。営門を入ると、北から南に向かって東西に長い６棟の兵舎があり、このうち奥の第４棟と第６棟を教室として使用することとなった（第５棟は解体）。このほか、旧医務室を学校本部、旧馬小屋を講堂・雨天体操場、旧練兵場を屋外運動場にそれぞれ代用した。現在の市民市場の辺り一帯ということになろうか。旧兵舎は、堅牢な構造ではあったが、極めて使い勝手の悪いものであった。部屋割りが長方形で授業の声も通りにくく、また採光が悪くて薄暗く、廊下を挟んで北側の教室はとくに暗かった。戸板や窓ガラスの破損も多く、そこから寒風が容赦なく吹き込んだ。何よりも極めて不潔で、旧軍隊の置き土産ともいうべき南京虫が頻繁に出没するのには閉口した。

　この仮校舎からの復興の動きは、早くも21年度後半から具体化した。すなわち、中川秀松校長（21年10月就任）を中心に、学校、父兄会（のちにＰＴＡ）、同窓会の３者で、22年３月「秋中復興促進同盟」を結成し、関係方面に働きかけた。県当局も積極的に対応し、23年２月に本館（学校本部と７教室）、同年12月に講堂・雨天体操場（第５棟跡）、25年１月に普通教室（16教室、第４棟跡）、26年３月に特別教室（第６棟跡）が相次いで竣工し、ここに復興完成。37年３月、手形字中台の現校舎に移転するまで存続した。

　このように、終戦直後の母校は未曾有の校舎難に陥り、在校生は極めて劣悪な環境下に置かれたが、これにめげることなく勉学に運動にいそしみ、卒業後、各界に有為の人材を多数輩出したことを誇りに思っている次第である。

参考資料　玉木正行「校舎難の顛末」（羽城　復刊第１号）

　　　　　中川秀松「本校復興に関して」

　　　　　　　　　　　　　　　（羽城　復刊第１号、第２号）

**聖**

**火リレーで秋高祭ＰＲ**

**成功呼んだ手踊り宣伝隊**

**河村　鴻允（昭和35卒）**

小生が駅前校舎で学んだのは、昭和32年４月から昭和35年３月までの３年間である。当時の全生徒数は１学年から３学年まで男女合わせて千五百数十人で、小生の年次の場合は総勢５１２人（女子生徒48人）、Ａ組からＪ組までの10クラス編成で、その内の２クラスが男女共学である。学校の敷地周辺には、金座街、テアトル、読売ホール、朝倉市場の他に日赤病院などがあり、交通の便が良いことも相まって市民にとっては非常に利便性の高い街並みであった。その一方で歓楽街もあり、学園として不適当な場所としてＰＴＡ関係者から移転論が出ていたそうである。

**河村　鴻允**（かわむら・こういん）

秋田大学卒。工学博士（東工大）。

昭和39年秋田大学鉱山学部電気工学科助手を振り出しに講師、助教授。

米国コネティカット大学客員準教授、秋田大学医療技術短期大学部教授、同大医学部医学科教授などを経て、平成19年退職。秋田大学名誉教授。

　校舎は旧歩兵第17連隊の木造兵舎跡であり、教室、部室および合宿所には事欠かなかったが、生徒会総会では女子トイレが少ないとの不満の声が上がっていた。昭和34年頃の駅前校舎の全景を写した航空写真が写真１である。校舎は南側、東側および北側の２階建ての建屋と、北側建屋と南側建屋の間に位置する体操場とで構成されていた。南側建屋は主に２年生の教室および実験室として使われており、生徒会室が１階にあった。東側建屋は校長室、職員室および３年生の教室として、北側建屋は１年生の教室および定時制として使われていた。小生が入学した時には、新入生は出身中学校別に２年生の教室に招集され、先輩諸氏によるオリエンテーションを兼ねた良い意味での吊るし上げを食らったことを記憶している。体操場では新入生と在校生との対面式があり、放課後毎日のように応援団幹部の厳格な指導の下で校歌や応援歌の練習に明け暮れた。この時期に集中的に教え込まれたお陰で、卒業以来半世紀を超えた今日でも校歌、校友会歌および秋高音頭などを忘れずに口ずさむことが出来ている。

写真１　昭和34年頃の駅前校舎の全景

　校舎の西側に野球場と陸上競技場が一体となったグラウンドが見える。グラウンドは校舎の敷地に比べて低地となっていた。野球場の北東寄りに野球部などの部室、陸上競技場の南西寄りに屋外競技用備品保管倉庫、南側建屋の南西寄りに合宿所、東側建屋の東寄りに弓道場、北側建屋の北寄りにバレーボールコートおよび部室、中庭に２面のテニスコートがうかがわれる。

　現在の秋田駅周辺の街並みから母校の敷地跡を特定することは非常に難しいことではあるが、校舎およびグラウンドはそれぞれ、現在の秋田市民市場の辺りおよびＮＴＴ東日本秋田支店の辺りではないかと思われる。

　生徒会主催の学校行事で特記すべきイベントは、昭和34年９月26日から27日までの２日間にわたって挙行された秋高祭である。この秋高祭を成功に導くため、９月25日に聖火リレー走者と秋高音頭手踊り要員で構成された総勢二百数十人の宣伝隊を市内に繰り出すこととした。聖火リレーのルートは母校の歴史的変遷に伴う校舎移転地跡、在校生の姉妹の多くが通学していると言われていた秋田北高および聖霊高校の所在地を考慮に入れて設定した。この日には台風15号（伊勢湾台風）が和歌山県付近に接近していたため、生徒会役員一同はその実施に非常に気を揉んだものだった。聖火採火式（写真２）が東根小屋町（現中通５丁目）の旧秋田医学校跡地で、村岡一郎校長先生、発煙式トーチを作製した化学部員および生徒会長を務める小生との立ち会いの下で行われた。点火された聖火トーチを持った小生は、駅前校舎の玄関前までの約３Kmの距離を走破して次の聖火ランナーにバトンタッチしたまではよかったが、ぶっつけ本番で走ったため貧血状態になり、宣伝隊員送迎用バスの中でしばしの休息をとったという不甲斐ない思い出もある。

写真３　秋高祭宣伝隊

写真２　聖火採火式

　市内数か所の聖火リレー引き継ぎ地点では、白ズボンと半纏を羽織った粋ないで立ちの女子生徒とユニフォーム姿の男子運動部員による秋高音頭の手踊りを披露した（写真３）。この宣伝が功を奏してか、当日は秋高名物のデコレーション展示教室、各種文化部の紹介展示室および演劇舞台が設けられた体操場などは超満員となるほどの大盛況ぶりであった。中でもデコレーションでは、冷戦危機の時代に代表される政治外交の風刺、当時人気のあった日活映画俳優のアクションシーン、未来の宇宙開発および科学の発展など苦心の作品を出品し、ご観覧いただいた方々から高い評価をいただいた。昭和34年度に挙行された秋高祭が、校長先生をはじめ在校生全員の英知、努力および協力により成功裏に無事終了したことが、昭和35年３月発行の生徒会誌「羽城」11号に報告されている。

　終わりに臨み、期せずして秋高創立百四十周年記念誌に執筆者の一人として参画出来たことに感謝し、母校のますますの発展を祈念してペンを置かせていただく。

昭和26年3月26日付　秋田魁新報



**↑**昭和26年の男女共学化初年度、女子生徒の合格を伝える新聞記事より

〈…なお秋南高では女子35名受験者中27名が合格した。〉

**あ**

**れから半世紀**

**赤沼　　侃（昭和39卒）**

昭和36年４月、秋田駅前校舎最後の入学式が挙行された。村岡一郎校長の式辞は、校歌の解説と「硬式野球部のエースであった渡辺投手が一浪の末東大に合格した。初心を貫いた文武両道の鑑である」といった内容で「勉強オンリーの学校に入ってしまったのかな」と入学したことを少し後悔していた。

**赤沼　　侃**（あかぬま・ただし）

昭和44年３月武蔵大学卒。同年三傳商事（株）入社、同55年課長。同60年４月（株）アキタシステムマネジメント部長、同61年取締役、同63年常務取締役、平成11年代表取締役専務、同14年代表取締役社長、現在に至る。

　入学してすぐ、応援団員が「昼は応援練習をするから早飯して、体育館に集まれ」とふれ回ってきた。中学との違いに驚いたが、じきに慣れて、３校時どころか２校時終了時でも食べられるようになった。廊下は帽子を被って歩くし、下駄を履いて通学するし、あっという間に秋高生らしく？　なっていった。

　校舎の外見は、映画「二等兵物語」の兵舎のようだったが、校内の汚さはより酷く、体育館への廊下は根太が折れていて、歩くとトランポリンのように弾むし、窓の桟には厚さ５mmもの綿ゴミが化石のように硬く積もっていた。長い間、汚い雑巾を絞らずに撫でていた結果、層を形成したものだろう。外壁の染みは、２階から掃除後の汚水を壁伝いに流していたものだった。体育館は古くて狭く、卓球部、篭球部、バドミントン部、体操部などがひしめいていた。正に古い校舎の末期症状だった。

　在籍したバドミントン部では、トレーニングを兼ねて新校舎まで数回走ったことがあり、建設中の内部を見ることができた。工事のおばさんたちから「こんたいい校舎さ入れていいな」と言われたが、高校生の目から見ても施工は雑で下手だった。しかも２、３階には廊下がない。「厳冬期はベランダを歩けるか」と疑問も生じた。案の定、引越して間もなく、雨漏り箇所があり「鉄筋バラック」と命名された。北国の冬を知らない沖縄の人が設計したらしいが、スチーム暖房もほとんど役に立たなかった。

　後日談だが、施工業者は数年後に倒産した。大学卒業後、三傳商事に入社した私はその業者の焦付債権が残っているのに気付き、貸倒処理を担当した。皮肉な巡り合わせであった。

　新校舎の教室には個人用のロッカーがあった。出席番号順に算用数字の横並びで割り当てられると思い、さっさと自分のロッカーを決めて、中にあった鍵を確保し、ほくそえんでいた。甘かった。担任で国語の北川茂治先生は、教科書どおり右列から縦並びにロッカーを指定し、鍵は集められてしまった。まだ１年生が入学していなかったので、Ｉ君と無人の教室から自分のロッカーと同番号の鍵を入手。マイ・ロッカー気分だった。

　ところが、閉めたのに開錠するイタズラ者がいた。防衛のため、錠を分解して改造し、マスターキーでも開けられない錠を作った。鍵も自分で作り「ゴロッ」としていた。

　当時は定期券購入のための「通学証明書」発行に時間がかかって不評であった。「割印を押すだけなのに」という。〝民衆〟の声に応えて消しゴムで精巧な割印を作り、押印待ち証明書が多い日に限り数枚押してやった。何も問題は起きなかった。

３年生になった昭和38年４月、鈴木健次郎校長が赴任してきた。「汝、何のために其処に在りや」の訓示は、ホジなし高校生の心にも強く響いた。今でも迷った時など、思い出しては軌道修正している。

　この他にも、運動会が復活して我が白雲隊が紫雲隊に大逆転して優勝したこと、練習なしでボート競技に出て腹切りしてしまったこと……等々、次々と新旧校舎の思い出が浮かんでくる。学校の勉強は嫌いだったが、社会に出てからは伸び伸びと仕事に打ち込んでこられた。お蔭で、高齢者になった今も現役で仕事を続けていられるのだと思う。私のような成績の悪い生徒を落第させることもなく「伸び代（しろ）」を残してくれた秋高に感謝している。

　卒業近くになって、某組で某先生が「お前たちのような成績の悪い学年は見たことがない。秋高開闢（かいびゃく）以来最低だ。秋高の恥だ」と言ったという話が聞こえてきた。「オレも随分平均点を下げて足を引っ張った」と責任を感じたものだった。

　そんな男が今、後輩たちには「秋高に入って褒められたりいい気分になったことがあるだろうが、それは校名を高めるような実績を残した先輩たちのお蔭であって、君たちはその恩恵を受けたに過ぎない。今こそ『やっぱり秋高出は違う』と言われるような仕事をすることが母校や先輩への恩返しとなり、伝統を守ることになるのだ」と言い聞かせている。

３年ぶりに復活した運動会の仮装行列（昭和38年、先頭右が筆者）

**老**

**朽から新築まで**

**４つの校舎で学ぶ**

**長谷部裕司（昭和62卒）**

たまに、同級生と会うと一瞬で昔の自分に帰るという経験は誰しもあることと思う。勉強の苦労話や部活動の自慢話、担任教師の妙なくせ、様々な行事やイベントのこぼれ話や裏話など、頻繁に顔を合わせる友達とでも、また、久しぶりに会った同窓生とでも、話は尽きることなく、学生時代の思い出があふれ出てくる。不惑の歳をかなり過ぎて、頭髪や眼、腰などに様々な変化が現れてきた今でも、やはり、古き良き時代の忘れられない思い出を抱き続けているようである。

**長谷部裕司**（はせべ・ゆうじ）

由利本荘市道川生まれ。平成３年３月北海道大学教育学部卒業。同年４月秋田銀行入行。平成25年３月現在大町支店長代理。秋高同窓会昭和62年卒代表理事。秋田市在住。

　私が高校を卒業してから４半世紀が過ぎたわけであるが、今時の高校生を見ると、私の時代では考えられないくらいみんな小奇麗で、ファッショナブルで、格好良い（もっとも、これは私の主観であり、このように思うのは、私が高校生時代に特別に小汚く、服装に無頓着で、格好悪かったせいで、他の人はそれなりに格好良かったのでしょう）。モデルのような髪型で自在にスマホを操り、夜半のコンビニで夜食を買っている姿などを見ると隔世の感が生じる。ただ、その会話に聞き耳を立ててみると、部活の話やクラスメートの話など、やはりその内容は我々の時代と大差ないようである。彼らが（彼女らも含めて）今の私の年代になった時にも、時の高校生を見て、やはり同じような感慨にふけるのであろう。

　さて、高校時代の話をしたときに必ず出てくる話題のひとつに「校舎」がある。

　私が入学したのは、春の選抜高校野球で初出場の東京岩倉高校が、桑田・清原を擁するＰＬ学園を破り初優勝を果たした昭和59年の春。伝統ある秋高生の一員となる自覚も半ばで、６割の緊張、３割の不安、１割の希望を胸にうぐいす坂を登り、「理科棟」で高校生活の第一歩を踏み出した。その当時はまだまだ真新しさが残っており、旧校舎の同期生を尻目に、ほんの些細な優越感に浸っていた。

　電電公社がＮＴＴに民営化された頃、私は２年生となり、「旧校舎」が第２の学びやとなった。「廊下がない」という、私にとって衝撃的であった校舎は、数十年にわたり数多くの諸先輩の高校生活を見守り続けた歴戦の老兵のように、やがて取り壊される運命にありながら、なお威厳と存在感を示していた。この校舎で学校生活を送ることができ、遅ればせながら「自分は秋高生の一員と認められたのだなあ」と感慨に浸った。

　２年の途中で旧校舎の取り壊しが始まり、プレハブの仮校舎に移転。３度目の校舎での授業が始まった。暑いときには火災報知器が誤作動するような環境で、まさに「汗水流して」勉学にいそしんだのも、今となってはひどく懐かしい。

　そして３年生の秋、いよいよ新校舎が完成。４度目となる校舎はすべてが斬新であった。新築の真新しさはもちろんであったが、授業は教科ごとに移動、ホームベースでのクラスミーティング、広々としたコモンスペース、ＣＭにも使われたステンドグラスなど、およそ当時の高校生の私の頭では発想すらできない、文字通りの「新校舎」であった。大学のようであり、海外の学校のようであり、一回り大人になったような貴重な経験をすることができた。休み時間になるとコモンスペースのふかふかの床の上で、プロレスの関節技を掛け合うというような、子どもじみたことができたのも、新校舎ならではの楽しみであった。

　高校時代の３年間で４種類の校舎で過ごした経験のある人はあまりいないのではないかと思う。あの校舎の時にはあんなことが、あの教室ではあんな経験をした……などと、他の人の４倍も思い出にふけることができることは、これといって人に秀でるものがない私にとって、数少ない自慢である。

　新校舎の落成という記念すべき節目のタイミングで高校生活を過ごすことができたのは、何物にも代えがたい貴重な経験であった。また、綿々と続く秋高の歴史の変遷の立会者として本誌発刊に際し当時を振り返ることができたことに感謝し、このように自身の思いを綴ることができたことを光栄に思う。手形の丘に泰然とたたずむ母校の校舎に思いを馳せ、久しぶりにかつての仲間とともに昔話に花を咲かせながら、甘美なる酩酊にでも浸りたいものである。

(昭和62年度卒業アルバムより)

ありがとう！満身創痍、青春を受け止めたね

伝統を引き継ぎ、新しい歴史を刻みます